

図書だより

〈第20号〉

平成元年2月20日

呉工業高等専門学校

図書委員会



▲閲覧室カウンターの一コマ

目 次

〔読書感想文〕

- 「ハックルベリー・フィンの冒険」(マーク・トウェイン) 1 E 谷 智美……2
 「友情」(武者小路実篤)…………… 1 A 川崎 洋明……2
 「ベトナム戦争」(亀山 旭)…………… 3 E 小森 崇……3
 「バナナと日本人」(鶴見 良行)…………… 3 C 大賀 寿聡……4
 「老人と海」(ヘミングウェイ)…………… 4 M 開原 真一……5
 「木に学べー法隆寺・薬師寺の美ー」(西岡 常一)…… 4 A 澤津橋一路……5

〔ソクラテスの死について〕

- 何故ソクラテスは脱獄しないで毒杯を仰ぐ道を選んだのか
 ー私の解釈とソクラテスへの反論ー…………… 2 M 本庄谷 拓……7
 ーソクラテスはやつ？ー…………… 2 C 倉本 大介……8

〔外国人の目〕

- My Memorable Life in Japan…………… 研修生 Teocasimiro O. Prado……9

〔窯場めぐり〕

- 山陰の窯場を訪ねて(四)…………… 一般科目教官 橋本 紘二……12

〔郷土の歴史〕

- 呉についての史料紹介…………… 一般科目教官 宇根 俊範……15

〔海外だより〕

- 冬のギリシア紀行…………… 一般科目教官 岩根 三邦……17

情報処理関係図書を受け入れについて……………20

新着図書案内……………21

編集後記……………25

読書感想文

「ハックルベリー・
フィンの冒険」

(マーク・トウェイン)

1 E 谷 智 美

マーク・トウェイン、私はあなたが許せません。なぜなら、私の大好きなトムをこの小説の中へあまり出してくれなかったからです。もちろん『ハックルベリー・フィンの冒険』と書いてあるのだから、主人公はハックなんだと、心に言い聞かせたものの、やはり私にはトムが必要でした。この本を読む前に『トム・ソーヤの冒険』を読み、私はトムに惚れました。出来ることならトムと手をつないで私の故郷の山々を駆けめぐり、きれいな川で魚などつかまえたり、泳いだりしてはしゃぎまわりたいと思いました。そして、出来ることなら、私がベッキーになってトムと婚約したいと思いました。ああ、それなのに『トム・ソーヤの冒険』の続篇と期待させておきながら、出てくるのはハックにジムにペテン師たち。トムは最後にちょこっと顔をのぞかせただけ(と、私には思えた)。悲しいかぎりです。

そして、もう一つ許せないことは、この小説の中のトムは(最後の場面を除いて)私の嫌うような言動をしょっちゅうしてたことなのです。私はトムの言葉を聞くたびに、ああ、トム・どうしてそんな悲しいことを言うの?と、心で嘆いていたのです。そうして、こう叫ばずにはいられませんでした。なんていじわるな、マーク・トウェイン!

でも、くやしいことに、私はこの小説を『トム・ソーヤの冒険』以上に楽しく感動しながら読んでしまいました。ハックがおやじさんから逃げようとしたり、グレンジャーフォード家とシュバードソン家の無意味な流血騒ぎから逃れようとした場面はページをめくってる手がピピピッと緊張しちゃって、それはそれは、興奮しました。だけど、その二倍も三倍も胸がドキドキした場面があるわけで、その場面というのは、トムとハックがトムの言う『規則』に従って、ジムを自

由の身にしてやるという場面です。トムとハックとジムが逃げ出し、トムがズボンをはきかきひっかけたところなんか、もう、胸がパンッとってパンクするかと思いました。

この辺までくると私はまたトムが大好きになってしまいました。それは、トムがジムの自由を必死になって守ろうとしたからです。この場面にはちょっと、いや、すごく感動しました。もしトムがそばにいたなら抱きしめてあげたいほどでした。そして、こう叫ぶでしょう。「なんて素敵なおトム!」もちろんハックもいい奴でした。黒人のジムを助けるべきかどうか悩み、メアリー・ジェーンたちをだまし続けていることに心を痛め、その他、何度も良心と戦い、そして克服していく姿は、時にはトムよりも素敵だったように思えます。そして一番最後に帽子をとって、「みなさんさようなら」と言われると、ハックと別れるのもつらくなります。そういうわけで私はマーク・トウェイン、あなたを許してあげます。

「友 情」

(武者小路 実篤)

1 A 川 崎 洋 明

『友情』に出てくる野島と大宮という二人の人物は、非常にかたい友情で結ばれていると思った。彼らは、おたがいに尊敬しあっていた。大宮は、野島が世間から悪口を言われた時は、淋しがる彼をなぐさめることに骨を折った。また野島も、大宮の作品が少しでもまわりから悪口を言われると、怒らないわけにはいかなかった。それほどおたがいに友人として相手を思い、また裏切らぬ真心、すなわち一友情—それも非常にかたい友情が彼らにはあったのだろう。この作品を読んで友情とは、なんとすばらしいものなんだろうと実感した。

恋愛には、友情は欠かせないものであるだろう。また、恋愛によって友情は、大きくなる時があるだろう。

逆に小さくなる時もあるだろう。しかし、恋愛と友情は切っても切れない関係だと思った。『友情』は、恋愛のことが中心に描かれている。だから、友情のことが数多くでてきている。

この作品は、青春のあらゆる面からとらえているので、『友情』は、全人的な恋愛文学だと思った。

青春時代で誰にでもある問題といえば、恋愛の問題と友情の問題の二つの問題であると思う。前にも言ったとおりこの二つは切り離すことが出来ないと思う。恋愛をすれば、友人に相談などをし、友情が関係してくる。これは、当り前のことだろう。恋をして、友人にそれを話して、手伝ってもらったり色々世話になる。『友情』では、野島が好きになった人が、大宮を好きになっても大宮は、野島のために彼女をさけて、外国へいったりした。僕は、大宮という人は、とても友達思いのいい人だと思った。自分を犠牲にしてまで友人に協力をする。なかなか、そんなことをする人はいないと思う。

この作品を読んでいて、対話文が多いことに気付いた。辞典で調べてみたら、武者小路氏は、小説家というよりは戯曲家にふさわしいそうだ。だから対話を根拠としなければ、作品をより一層、発展させていくことができないのだろう。しかし、対話文が物語を面白くする一つの方法であると思う。また、登場人物の心情・感情がよく分る。というような利点もたくさんでてくると思う。対話文を使わないと物語を発展させていくことができないということがあるが、逆にいえば、武者小路氏にしかできない、武者小路氏がもっている、物語を面白くするような特有なところだと思った。

また、この作品の文体は、非常に簡潔で明るい。どんなに複雑なことでも、のびのびと明るく、また片寄りがなく平端にかいていると思う。だから、読むのにやさしいかなと思ったけど、実際読んでみるとそうやさしくはなかった。どちらかといえば難しい方だと思った。

『友情』は、恋愛・結婚・友情・芸術・社会問題、またそれらをめぐる様々な問題といったようなことを描いている。日常生活でおこる出来事、僕達もいずれ体験するようなことなど色々あったが、友情の大切さ、偉大さなどが一番印象に残った。また、これからは今以上に友達を大切に、そして自分も大切にしていこうと思った。

恋愛によってより強く生きるものがあるように、失恋によってより強く大きくなるものがある。それは、友情だと思う。友情というものは、恋愛によって強くなり、また失恋によって強くなり、恋をすればするほど強くなるものだと確信した。

この作品を読んで、友達の大切さ、友情の大切さ、そして、友情には恋愛が必要であるということが分かった。また武者小路氏が言いたいことも少しは分かったつもりだ。この作品を読んで本当によかったと思う。

「ベトナム戦争」

(亀山 旭)

3E 小 森 崇

この本は、ベトナム戦争に特派員として立ち会った一人の日本人記者によって、戦争の経過やその悲惨さが書き著わされているとともに、著者の原地での体験などを踏まえて、この戦争のもつ意味、また日本人を含めたアジアの人々にとってどのような意味をもつか問うている。

ベトナム戦争は元はベトナムの統一に対し反対する南ベトナム政府と、これに不満をもつ南ベトナム解放戦線、北ベトナムとの対立にあった。南ベトナム政府にはアメリカが加わり戦争は激化した。この戦争によって多くの南ベトナム政府軍の兵士、そして解放戦線軍の兵士の犠牲者がでた。またアメリカも大きな犠牲を払った。しかしアメリカ軍のベトナムでの戦略はすさまじいと感じた。近代技術を用いた兵器を使った攻撃で、多量の爆弾、砲弾を注ぎこんだり、化学薬品を上空からまいたりもした。また村を焼きはらい関係のない民間人を殺したりもした。それに対して解放戦線軍の攻撃は近代兵器(戦車や戦闘機)なしのゲリラ攻撃であった。まさにアメリカは負けるはずなどないと思っていたに違いない。ベトナム戦争において最強を誇った米兵もしだいに衰えて、大きな打撃を受けた。アメリカ側ではこのベトナム戦争に対して「偽りと誤算の歴史であった」と述べている。そうだとするとこの偽りと誤算の積み重ねのなかで死んでいったベトナム人に対する米国の責任はどうなるのであろう。またこの戦争には韓国も加わっていたが、このアメリカの

誤った戦争に直接加担し、多数のベトナム人を殺した韓国のベトナム派兵を批判しなければならないであろう。

ベトナムの日本人はどうだったであろうか。兵士をベトナムに送り込むなど直接的に戦争には加わっていないものの、経済的な面で加わっていたといえる。日本企業のベトナムへの進出などもあった。ベトナム戦争において日本は無関係のように思われるがそうとはいえないのではないか。なぜ日本政府は、アメリカの北爆を含む戦争拡大を認め、戦争努力に協力してきたのか。この責任は大きいのではないか。

多くの死者をだしたこの戦争の本質は何だったのであろうか。この小さなベトナムに第二次世界大戦の使用量をはるかに上回る爆弾や砲弾が注ぎこまれた。数百万の難民、100万を超える民間人の死傷者が出た。アメリカ人そしてベトナム人にとって、この戦争は何であったのか。またアメリカの同盟軍としてやってきた韓国人はなんのためベトナム人と戦わなければならなかったのか。そして日本人にとって、また他のアジア人にとってベトナム戦争は何であったのだろうか。米軍が死ぬのも、解放戦線やベトナムの兵士が死ぬのも同じ人間の生命に変わりはない。本当に意味のある戦争だったのであろうか。

「バナナと日本人」

(鶴見 良行)

3C 大賀 寿 聡

この『バナナと日本人』という本を読み、たんなる果物のバナナに複雑な歴史があり、それを生産するフィリピンや台湾などの人々の苦労というものがよく分かったような気がします。バナナというものは、四季を通じて手に入り、値段も果物の中では安い部類に入るので、日本では、今だに根強い人気があるのだと思いました。

バナナがこのように大衆の日常的な食品となったのは、日本市場向けの専用農園が、フィリピン南部のミンダナオ島に開発されたからである。開発が始まったのは1960年末だから、まだ28年ぐらしかたっていない。それ以前の日本は、台湾や、エクアドルその他の

中南米諸国からバナナを輸入していた。

バナナが商品として最初に日本にやってきたのは、1903年、日露戦争の前年である。このことからバナナというものは、日本に来てまだ一世紀もたっていない、それほど昔にやってきたのではないことが分かります。日清戦争と日露戦争には含まれたこの時期は、日本社会の階級的な矛盾が激化し、社会主義の運動が広がった時期であったが、同時にまた、外国文化への関心が民衆の間に浸透した時代でもあった。このような時代相がバナナの関心をよんだのだらうと思います。

バナナは、何千年の人類史の流れのなかで考えると、栽培植物として不思議で、しかもすばらしい過去もっている。バナナの全世界の生産量は果物のなかでいちばん多く、細分すると100以上の種類がある。バナナが果物としてだけでなく主食の一部としても利用されるようになったことの裏には、農業進歩にかけた人類の智慧が隠されている。

次に台湾バナナからフィリピンバナナへ変わったことについて述べる。台湾産は、台風の進路に当り、生産量にムラが多く、個人栽培農家であったため品質も統一されていなかった。台湾バナナの品質にクレームをつけられることが多かったが、ブームは続いた。そして輸入は毎年増大し、まさに高度経済成長時代の経済繁栄を映し出している。しかし台湾産は、台風被害にあい、エクアドル産に抜かれ、その三年後にフィリピン産へと日本市場における輸入バナナは交替した。フィリピンバナナは大農園で栽培されていたので品質にムラがなく、業者は歓迎した。その結果、日本市場にフィリピン産が九割、台湾産が一割となった。台湾産も、地理的に台風の進路に当らなければもう少し市場を確保することはできたと思う。

フィリピンという国は、日本から近く、今から前にも増して交流が深まってくると思う。バナナのような食物について探求し、それを深めてゆけば、日本とフィリピンの両国の市民が平等に手をつなぐきっかけが生れてくると思います。



「老人と海」

(ヘミング・ウェイ)

4M 開原真一

この物語には、ひとりの少年が慕う、年老いた漁師が恐らくは彼の生涯の中で、最も大きい獲物との戦いの様子が描かれている。老人は長い間、運に見放されていた。来る日も来る日も空の舟で港に帰ってくる老人を見るのが、少年にはとても辛かった。それでも少年は老人を優しく勇気づけた。他の漁師たちも老人には優しくしてくれる。それはけっして単なる哀れみの気持ちだけではないと思う。老人は若い頃、腕のいい漁師だったに違いない。今だって、腕は落ちてはいない。ただ運に見放されているだけだ。しかし老人は「毎日が新しい日なんだ。運が向いてくれれば、その時の用意はできている。」と考え、魚を追っていた。老人は海の上で孤独な戦いをする日が何十日と続いていた。その寂しさを紛らわすため、彼はだれもない海の上で、ひとりごとを言うようになった。漁師たちは海の上ではむだ口をきかないことが美德とされている。老人もそうあるべきだと考え、そうしてきた。しかし今では大声で口にだしている。海と空しかない孤独な場所では人間はこうも弱気になってしまうものなのか。

今まで何の動きを見せなかった綱に付けて浮かべていた生木の枝のひとつが、運が向いてきたことを老人に告げた。長い間、待ち望んでいた機会に老人は興奮する身体をおさえ、「よし、よし」、「わかったよ」とこうなる事が分かっていたかのように言った。老人は今までの経験から、すばやくそれが一匹の大きなまかじきであることを読みとった。しかし、その獲物は老人が考えていた大きさ、強さとも遥かに凌ぐものだった。老人は綱を背中に回し、生涯最大の獲物との命をかけた戦いが始まった。老人はそれから3日間にも及ぶ戦いの間、「あの子がいてくれたらなあ」という言葉を何度も口にする。年老いた彼に今の獲物は強大すぎたのだ。老人はそんな自分に「お前には、お前しかいない。なんとしてもやるんだ。」と言い聞かした。そういう状態が続く内に、老人には魚が、単なる獲物としての対象ではなくなってしまったのではないだろうか。相手を認め、お互いに、自分の命を賭けて相手

を殺す、どっちがどっちを殺そうと、それは定められた宿命であると考えていたのだと思う。お互い、人間と魚とが、自分の全ての力で戦う様は、人間が、魚がという言葉では表せないと思った。

戦いは終り、老人は死の瞬間のそのものの力と美しさを惜げもなく見せつけられた。海は血であたり一面真っ赤に染まっていて、深さ1マイルをこえる海の青さを背景に、それは雲のようにあたりへひろがっていく。そのなかに魚は、銀色の腹を見せて、静かに波のまにまに漂っていた。永遠の静寂の中、老人は目の前の奇蹟に酔っていた。老人はその後、港に帰る間に鯨に獲物をすべて食いちぎられてしまう。必死の抵抗にもかかわらず無惨な姿になっていく魚に対し老人は自分の身がえぐられる苦痛を感じた。老人はすでに、魚を同胞とし気づかい、鯨に対し言葉にならない怒りを感じていたのだろう。港についた老人はベッドに横たわるなり深い眠りについた。老人が眠りからさめたら、全ては夢の中での出来事となり、またいつもの静かな生活にもどることだろう。

「木に学べ—法隆寺・薬師寺の美—」

(西岡 常一)

4A 澤津橋 一路

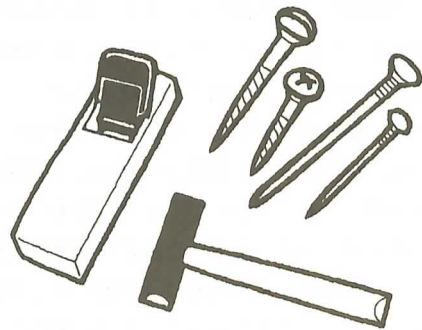
いろいろな人が、たくさん法隆寺を見に行くが、ただ世界で一番古い木造建築だからって見に行くのなら意味がないと思う。法隆寺は古いから見に行くんじゃなくて、我々の祖先である飛鳥時代の人たちが、建築物にどう取り組んだか、人間の魂と自然を見事に合作させたものが、法隆寺だということを知って見に来てもらいたいと著者は最初に言っている。ぼくも、あんなほどと思った。確かに建築に興味のない人々にとっては、ただ見るだけと思う。だが昔の人がなぜ、どのようにして建てたかを知ってほしいと思う。法隆寺の建物には、創建当時の飛鳥の物もあれば、藤原時代の物、鎌倉、室町、江戸時代、大正、昭和と各時代に修理されているのだが、その時代時代の美に対する考え方や、建築物をどう考えとったかがわかると思う。法隆寺の美しさは力強い美しさだと思う。中門を支えている柱は大木を四つに割って作った四つ割りの柱と

は知らなかった。どうして、四つ割りということがわかったのかと思っていると、木の目を見るとわかるという。一本のままだと正目が出ず、割って作ったものは正目が柱の表面に出てくるという。金堂の柱に竜の彫り物が見えるが、あれは創建当時はなかったものだとこのことを読んでおどろいた。室町時代になって、修理する時に荷重を支えるために作ったそうだ。ああいう彫刻をほどこすことが美しいと思ったんだと思う。それにしても昔の人々はよく考えたものだ。飛鳥の当時には、飾りなんてなかったと思うし、そんな技術もまだなかったと思う。全然ないのかと思うと、万宇崩しの勾欄がそうだという。しかし、これは、上に登った人の転落を防ぐという機能があり、単なる飾りじゃないそうだ。それにしても、機能的に作っているものだ。金堂や塔の軒の出も長いが、どうしてかと思っていたが、次のことらしい。飛鳥の頃に伽藍造営の新しい技術が大陸から入ってくるが、中国に行ってみると、こんなに軒の出の深い建物はひとつもないそうだ。法隆寺の金堂や塔の軒の出はなんと4mもあるそうだが、中国の文ではせいぜい2~3mぐらいしかないそうだ。大陸から入ってきた建物の作り方には、こんなに軒の出を出すことはなかった。大陸から入ってきた技術を鵜呑みにしないで、雨が多く、湿気の多い日本の風土に合わせて、こういう軒の深い構造を考えたことに感心させられる。本当に昔の人はよく考えたものだ。

薬師寺は、火災や地震、大風などでほとんどの建造物がこわれ、東塔だけが残っていた。それを金堂、西塔、中門と復元してきた。この後、三蔵院、大講堂、回廊とまだかかる。回廊を復元するだけで、金堂と塔と中門を合わせたぐらいの年月がかかるという。そんなにかかるのかと思うと、本当にびっくりした。中門の南にあるのが南門で、この距離が短いなあとっていると、南門を本式にすると軒と軒が接するぐらいだそうだ。そして、今の南門は元の西門で、それを移したという。虹梁の曲線が美しい。東を立てずに蕁股で、棟を支えているんだ。ここの柱も法隆寺とくらべるとずいぶん違うと思う。エンタシスも少なく、ゆるやかだ。そして、細くみえる。こうすることで、太い柱を少しでも細く見せようという気持ちがあったのではないだろうか。だから法隆寺は力強く、薬師寺は強いものをやさしく見せようとする違いがあると思う。金堂を復元するのに大論争したという。本尊さまを守るの

に防火シャッターをつけることや中心の所だけコンクリートでつくらないといけなかったらしい。だからそこはコンクリートなのだそうだ。それにしても金堂はどの寺も同じことかと思っているとちがうそうだ。四天王寺は塔が中心、薬師寺は本尊が中心だ。法隆寺はその間ぐらいだ。したがって、本尊中心になると、それだけ金堂の役目は大きいのだろう。又、本尊は銅でつくられているという。確かに何で作られているのかと思っていたが、まさか、銅でつくっているとは思わなかった。しかし、銅は少しだといいいけど本尊という大きいものをつくるのに、相当な量と労働力を費やしたと思う。本には10トンの銅を中国から運んできたと書いてある。たいへんな仕事だったと思う。あと有名なのが東塔と西塔だが、東塔だけが創建当時のものだという。西塔も金堂もこの東塔をもとに考えたりしながら設計して再現したものと思われる。しかし、東塔も長い間、地震や雨風でいたんだりすると思う。本を見るとやはり、創建当時とそっくり同じというわけではないらしい。したがって、東塔より、再建した西塔の方がはくは創建時の形を残していると思う。

最後に、この本を読んで、法隆寺や、薬師寺の知らない面を見たと思う。だから、今後、いろんなところで役に立つだろう。



ソクラテスの死について

「何故ソクラテスは脱獄しないで、
毒杯を仰ぐ道を選んだのか」

—私の解釈と ソクラテスへの反論—

2M 本庄谷 拓

前略、ソクラテスが何故死を選んだのか、ということとは本人でないと絶対わかるはずもない。ならば完全な答えがないのだから、私はプラトン著の対話集を私なりの解釈をして彼の考えを見てみようと思います。

まず、ソクラテスが裁判にかけられたとき、彼はすでに70歳を数えていた。毒杯を仰いだのは、すでに余命少ないからというのは冗談にしても、この老齢だったというのは少しばかりは関係があったと私は思います。

上記のことは少し置いておき、本題について考えてみることにしましょう。

彼が死を決意したのは、この裁判を受けることになったと思います。プラトン著の書物を見ると、ソクラテスはすでに判決を聴く前に有罪になることを予測しているし、その後、あわよくば自分の意志を理解してくれるかも知れないという思いがあったかどうかは知らないが、一般の人が聞けば必ず腹を立てるような弁明をし、死刑を受けてしまっている。わざわざこんな不利な裁判を受けたのは、彼にはその時すでに、死の決意があったのだと思います。

何故、彼はこのような覚悟を決めたのか、クリトンの説得にも応じず逃げなかったのか。裏の複雑な理由はいろいろあるが、何であれ彼がアテナイの法廷に告訴された表向きの理由は「青年に害毒を与え、国家の認める神々を認めない」というものであった。しかし、このことはプラトン著の書物を読めばわかるように、ソクラテスの考えは全く逆であった。彼はそれこそ誰よりも国家を愛し、国家の神々を愛した。それ故、彼は自分の愛する国家を裏切って出て行くようなマネを

嫌い、いかなる時も不正を行なわないという彼の考えによる行動だったのである。

『クリトン』によると、たとえ自分が不正な裁きによってこのようになったのだとしてもそれに対する不正、いわば仕返しもしけないと言っている。しかし私は、ソクラテスは自分が死ぬことによって仕返しをしようと考えていたと思う。考えていなくても、彼は自分が死ぬことは最高の知者を失い、人々は後悔すると言っている。いわゆる、自分の真実の教えに対して耳を傾けなかった人々に対して、もう真実を知ることができなくなるという仕返しをしていると思う。

ソクラテスは立派に不正を働いているという反論はこのぐらいいして、彼の死因と、老齢であったことの関わりを考えてみよう。彼が国外へ逃げ出さなかった理由はすでにわかっているが、それなら何も死ぬことはないと思うが、彼はわざと別の重い刑を言わず、自ら死を選んだ。これは確かなことである。さて、それは何故か。それは、ソクラテスの哲学に対する考え方を表していると思う。彼は哲学をすることは死の練習だと言っている。哲学するとは、肉体を通さず魂だけで純粹に物事を見れば真実が見えるということをも肉体ある人間がしているのである。しかしそれはやっぱり肉体が邪魔である。が死する時、自分自身は魂に凝集して肉体と分離する。肉体は滅んでも魂は不死であり、純粹に物事を見れる魂は真実在の世界へ行くと彼は考えていた。彼は生まれて70年、哲学をしてきて、本当の知者となった今、その真実を確かめようと思ったのだと思います。魂の不死を証明し、真実在の世界へ行ったかったのだと。彼は真実というものを信じることによって望んで毒杯を仰いだのだと思います。

しかし、私の思うように真実がありえない、としたら、この考え、そしてソクラテスの死因が当たっていたら、彼の死はとても無意味なものに終わってしまうのであるが。



—ソクラテスは 変なやつ?—

2C 倉本大介

『クリトン』の中のクリトンはソクラテスをなんとか逃がしたくて、ソクラテスに話をするのだけど、ソクラテスは首を縦に振らない。クリトンが話をすすめていくうちに、ソクラテスは、「いままでに僕が言っていた原則的な原論を、僕がこういうまわり合わせになつたからといって、いまさら放棄することはできないのだ。むしろそれは、僕にとっては、ほとんど前と変わらないものに見えるのであって、僕がいま敬意を払い、尊重している原則というのは、以前に僕がそうしていたのと同じものなのだ。だから、もしわれわれが、これまでに言われたこと以上に、もっとすぐれたことを、いまこの場で言うことができなければ、いいかね、君、僕は決して君に譲歩しないだろう。たとい大衆の威力が、いま現にある以上のものをもって、監禁とか死刑とか、財産没収とかいうことを、われわれの頭上にひらめかして、子供たちをお気けでおどかすように、われわれをおどかすとしても、僕は引かないのだ」とこう言った。このことを聞いて自分はソクラテスという人物が信じられなくなった。なぜなら、自分も含めソクラテスも人間である。同じ人間だから、死ぬまぎわくらい怖いと思うものなのに、ソクラテスのとつた行動には不思議なものがありすぎる。ソクラテスのとつた行動が正しいのか、自分みたいに死ぬのが恐くて逃げ出すのが正しいのかは分からないが、ソクラテスが人より変わっていることはよく分かった。

それから、ソクラテスとクリトンの問答だが、ソクラテスは「アテナイ人の許しを得ないで、ここから出て行こうと試みることは、正しいことなのか、それとも正しくないことなのかという問題だ。そして、もしそれが正しいということが明らかになったら、僕はそれをしてみよう。しかし、その不正が明らかになったら、やめることにしようではないか」とも言っている。これもまちがっているのかは分からないけど、やっぱりどこか変であるような気がします。死ぬにしても、それが不正と分かったら死なないし、正しいと分かったら死ぬ道をとるとのことなのです。ここら辺

りから、ソクラテスが逃げずに、毒杯を仰ぐ方を選んだのが分かり出したような気がした。つまり、このままなら殺されてしまうとか、ひどい目に合わされるとか、財産を全て没収されるとかということを考えるより、常に正しいことを行う、不正を行わないようにするということがソクラテスの考えなのだと思う。ソクラテス自身が、逃亡せずに毒杯を仰ぐ方を選んだのは、死ぬことが自分にとって正しいと明らかにしたからだと思う。



- 「図書室では静粛に」
- 「読んだ本はもとの位置へ」
- 「帯出期間を守ろう」
- 「図書室での飲食はやめよう」



外国人の目

My Memorable Life in Japan

研修生 Teocasimiro O. Prado

It was a very cold night when I arrived at Narita airport and my legs were trembling hard when I was waiting for the limousine bus going to Tokyo. I arrived at Tokyo International Center very late in the evening where I will be staying for my Japanese language training. During my stay in this place, it was my first time to see and play with snow and it was great.

Our Japanese language training started after one week of briefing and orientation about the kind of society we will be dealing. We were 9 participants in our class, 4 were from Senegal, 2 were from the Philippines, and 1 each from Indonesia, Malaysia, and Thailand. "*Domo arigato*", "*Ohayo gozaimasu*", "*Konichiwa*", and "*Konban wa*" were the only the Japanese words I know when I arrived in this country. I have to study hard how to speak the language in order to have a good relationship with the Japanese people. We were taught formal conversation as well as writing in *Hiragana* and *Katakana*. In the class, we were required not to speak English but only Japanese. They also give us everyday examination known as our "Morning coffee" to practice our listening and writing. But what we don't like very much was we were given plenty of assignments everyday. However, we enjoyed studying the language especially during conversation practice because it seems that we were just playing. We also practice the language even inside the train when we go out together in order not to forget the words we have studied.



Taken during our Japanese Language Training (右端 T. O. Prado)

After 2 months of hard study, fun and enjoyment in our Japanese language training, I came to your college to receive trainings in the field of Mechanical Engineering. But when I arrived in this place, I can not understand and communicate with everybody because I only knew very few words. Everybody also speaks the language very fast and sometimes use local language. It took me about 2 months to adjust

to the language as well as the life in this new place. During these days, I felt loneliness every night especially in my hotel and wanted to go home. But later on, I found a lot of friends and forgot about going home because I was adjusted to my environment and can understand the language a little.

But maybe, I can not speak the language as good as today if I don't have professors like Dr. Hiromasa Nadano and Dr. Masaki Kohno who were very kind, understanding and teach me all the things I wanted to know, especially about my training and the language. From them, I met other professors from different departments of the college and of course, the staffs of the Mechanical Engineering department who were very friendly and supportive during my stay.

On my training, it was satisfactorily completed. I was trained on the various field of mechanical engineering. I also attended lectures and experiments with the 5th year students. However, I have difficulty on the lectures because I could not able to read *Kanji* letters. With this problem, the students were very friendly and helpful to me especially during the time that I could not understand the lecture. As a part of my training, I also have educational trips and research. I visited different companies like National Panasonic, Kyocera, Ryobi, Mitsubishi Heavy Industries and etc. Because of these trips, I had a chance to go sight-seeing to some beautiful places of Japan like Kyoto, Okayama, Miyagi, Kyushu, and etc. I have been to the Golden temple in Kyoto, Mt. Fuji in Shizuoka, Matsushima in Miyagi and etc. Of all the places I have been, Kyoto having a lots of temples and beautiful gardens is one of the best place to visit in Japan. But considering the beautiful places of Hiroshima like Miyajima, most attracted flower festival and most of all the very friendly people, I think Hiroshima is the best place to live.



Taken during my training in Kinki University

Most of the company I visited give importance on research, that is why I also wanted to have a knowledge on conducting a research. With the excellent supervision and guidance of my kind professors, I was able to conduct my own research. My research was successful and was able to conduct 2 finished research on the field of Tribology* during my training.

Some foreigners have problems on the food if they visit another country. But in my case, I don't have any problem at all. I have tried to eat cheap foods like instant noodle to expensive food like *shabu shabu*. But when it was my first time to eat *sashimi*, I thought I could not eat that kind of food because the fish was still alive. After I have tried, it taste very delicious and from that time I like it very much but without the grated horseradish(*wasabi*). I like all Japanese foods but *sukiyaki* is the food I like most. If I visit a Japanese house, they always prepare a lot of delicious foods that is why I am always overate that sometimes I could not stand up.

Having a lot of friends makes ones life more meaningful and enjoyable. It takes me a long time to make friends because I can't speak the language very well. But after I learned how to speak the language, I found a lot of friends and sometimes teach them English conversation. My friends were very kind and they took me to many beautiful places here in Hiroshima and tried me to eat different kinds of Japanese foods. They also invited me to join them on some of the Japanese festivals such as *hanami*, *matsuri*, *ikebana* and etc. I also have a chance to attend a *Shakuhachi* concert and *Shigin* contest. Sometimes, we go to *karaoke* stand and teach me Japanese songs.

In the next few days my training, fun and enjoyments will end because I must return to my country. I will bring with me the knowledge I received from my training in this college. But I will be missing everybody, especially the kind professors and friendly students. During my one year stay in this beautiful country of Japan, I learned a lot of good characters the Japanese people have. Many old Filipinos were wrong to their idea that the Japanese are very cruel people. I had proven during my stay that they are very friendly, honest and loving people. After going back to my country, I want to correct this wrong idea of the Filipino people. With their characters, I considered Japan is one of the safest country in the world where anybody can go home alone even very late in the evening without fear.

Lastly, I would like to thank everybody for your unmeasurable kindness to me during my stay in your college. But I am very sorry for all the troubles I have done. I think I will be missing everybody very badly but you will always be remembered. College students, good luck on your studies and hoping your success in the future. College professors, keep up the good job always. Again, thank you very very much and more power to everybody.

Maraming Salamat Sa Inyong Lahat!

(みなさまによろしく)

* 潤滑工学

窯場めぐり

山陰の窯場を訪ねて(四)

一般科目教官 榎本 紘二

これまで島根地方の窯元を中心に紹介してきたが、今回は少し足を遠くまで延ばして鳥取以東の窯元を訪ねることにする。

三次より中国自動車道を東に2時間程車を走らせると津山に入って来る。津山インターを出てR53を鳥取方面に向かってほんのしばらく進むと、左手に山陰直送の魚介類大売り出しと書かれた大きな幟が見えてきた。ここまで一気に車を走らせてきたこともあって、一休みのつもりで中に入ってみた。日本海で取れた新鮮な魚が所狭しと陳列されている。それらの値段の安いこと。幸いに、いつも車のトランクに積みっぱなしにしていた釣り用クーラーがあったので、松葉ガニともずくを買って求めた。店の主人は三日間位は大丈夫と言って、丁寧に氷詰めにしてくれた。言葉の通り、家に帰って開けてみたが、氷は解け切らず新鮮そのままであった。少し太めの歯ざわりのあるもずくの美味しかったこと。

中国山地の真ん中で早や日本海の香りをききながら、鳥取市を流れて日本海に注ぐ千代川と並行して走るR53を、鮎で名高い河原町までやってきた。河原町の中心部から西に向かって進み、中井の集落を通り過ぎて小さな橋を渡って行くと、牛ノ戸焼の窯元に到着する。前に川を控え、小高い所に大きな窯元の屋根がひと塊となっているのが見える。すぐ手前の建物が母屋のようであった。玄関前には一抱えもある自然石が置かれて、その表面に「牛ノ戸窯」と深く力強い字体で彫られている。間違いのないことを確かめ、戸を開けて中に入ると旧家らしく土間が続いている。二度程挨拶をしたが聞えないらしい。三度目の大きな声に、奥から中年の女性が出てこられた。五代目陶主小林栄一氏の御内儀であろう。牛ノ戸焼の開窯は、江戸時代の末に島根県江津の陶工小林梅五郎が、幾人かの弟子を

連れて寒村だった牛ノ戸に移に住んだことに始まっており、主にこの地方に密着した水ガメ・ドンブリ・スリパチ・徳利などを焼いてきた。昭和になってからは、新作民芸運動の影響を強く受けた四代目秀晴氏によって、民芸陶器を中心に茶器などが焼かれるようになり、現在の五代目陶主に引き継がれている、と言った旨のことがしおりに紹介されている。玄関に入ったすぐ左手の部屋に通された。部屋の中央には直径1m位もある特大の火鉢が置かれている。黒釉に白の流し掛けのあるどっしりとした焼物である。まだ火を入れる季節ではなかったが、あるべきはずの位置に置かれているといった感じで、不思議なほど季節はずれの違和感はない。目の前の飾り棚の上には、黒と緑を半々に掛け分けた大皿が飾られている。この掛け合わせの手法こそが牛ノ戸焼の特徴である。それにしても窯元らしくらぬ作品数の少ない展示室であるが、といふかしげにしている私の顔つきを見てとられたのか、今はちょうど窯焼きの前で残念です。うちでは年に三・四回窯出しをしますが、その都度お客様に案内状を差し上げ、全国の御愛顧の皆様にお越し頂いております。その時にほとんど引き取られていきますので、今はこれだけしか残っておりませんと、その婦人は奥から湯呑と小皿を持って来られた。これも黒と緑の掛け合わせの焼物である。単純に見える作業ほど実は難しいものであることは、焼物を趣味としている私にも推察できる。温度が低いと生焼けに、高温になり過ぎると釉が流れてしまい、黒と緑の釉が重なり合ってお互いの良さを消し去ってしまう。なかなかの技術が必要で、思うほど上手には焼き上がりにくい作品である。小一時間程おじゃまして、次の因久山焼の窯元に向かった。

もと来た道を引き返し、県道を真っ直ぐに因幡線に沿って進む。案内にあった久能寺を目当てに探してみるが、それらしき寺院の建物は見つからない。とんまなこと、てっきりお寺と思っていたのは間違いで、何んと地名だったのだ。通りがかりの人に道案内を乞い、やっとの思いで窯元の前まで来ることができた。古びた門をくぐり、きちんと敷かれた敷石の上を一步一步進むと、右手に新しく建てられた展示室があった。玄

関戸の上には、因久山焼と彫刻された大きな一枚板が掲げられている。緋もうせんの敷かれた広い展示室の棚には、たくさんの焼物が整然と陳列されている。ご自由にお入りくださいとの入口の案内に従い、はやる気持ちで中に入った。拝見して20分程過ぎた頃、つやつやとポマードでオールバックに髪を整えた紳士が入って来られた。陶主の芦沢良憲氏である。鳥取の中でもこの因久山焼の歴史は古く、藩主池田侯の御用窯として、京都清水焼の陶法を学んだ芦沢家が今日まで受け継いでいる。代々の陶主の作品が一所にまとめられて展示されており、茶碗・水指し・大皿とどれもすぐれたものばかりである。中でも一つの香炉に強く心引かれた。蓋のつまみが親指位のねずみで、非常に精巧に作られている。今にも動きだしそうな姿態で、まるで生きているように見える。つい思わず人指し指で触ってみたが、そのねずみはいやがって動いたような気がした。洗練されたわざから作りだされる茶華用品には丁寧さと気品が漂っている。現陶主の特徴は、藁灰釉を主体とした民芸風の素朴で落ち着いた作風にある。少しひねってはいいたが、窯変の見られる湯呑を一つ買い求めた。一度本焼きしたものをもう一度1200度以上で焼き上げるのが秘訣らしいが、やはり多くは形がひずむそうである。しかし、表面の色の下に二つ目の色が隠されているかのように見える発色には、見ても見あきることのない、時間の経過を忘れさせてくれるものを秘めている。



因久山焼

窯元を後にして鳥取市内に向かった。最初に訪ずれた学生時代とはずい分と様変わりして、近代的な都会になった駅前を通り、鳥取砂丘に車を走らせた。くつの中に砂の入るのも苦にせず、さらさらの砂丘の上を歩き、いちばんの高所に立って日本海を見下ろした。胸いっぱい日本海の空気を吸い込むと、身が浄化さ

れる思いと同時に、何かから解き放たれた自由の気分が込み上げてきた。ふと天橋立が見たくなかった。今から向かって、城崎温泉には日が落ちて暗くなるまでには着けそうである。公衆電話から、思い切って城崎の観光案内所に電話をかけてみた。直接に旅館の方に電話してみてくださいと二、三軒の旅館を紹介され、一番目の「鶴の屋」に尋ねてみた。お越しをお待ちしておりますと丁寧な応対に、そこを今晚の宿と決め、ハンドルも軽く一路城崎へと走らせる。山陰の松島と称される浦富海岸の美しい景色を左手に見ながら、日本海岸に沿って浜坂町まで、列車の転落事故のあった余部鉄橋の下を通ってR178をさらに東に進み、有料の但馬海岸道路をくねくねと曲がって円山川の河口あたりまでやって来た。ここからは円山川に沿って南下し、30分程で温泉街に着いた。入口の歓迎のアーチをくぐり、円山川の支流大谿川の両側に旅館や土産物屋が立ち並ぶ、どこか玉造温泉と似たたずまいの通りをゆっくりと車を進める。旅館街の一番奥まった、温泉寺下のロープウェイ乗り場の近くに「鶴の屋」があった。通された部屋は、下に小川が見下ろされる二階であった。荷物を置いて窓際の椅子に腰をかけ、下の小川を見ていると、アヒルのような鳥が三、四羽泳いできた。ふと、志賀直哉の短編小説『城の崎にて』の中の一文が頭に浮かんできた。

「ねずみはどこかへ逃げ込むことができれば助かる」と思っているように、長いくしを刺されたまま、また川の真ん中の方へ泳ぎ出た。子供や車夫はますますおもしろがって石を投げた。わきの洗い場の前で餌をあさっていた二・三羽のあひるが石が飛んで来るのでびっくりし、首を伸ばしてきょろきょろとした。スポッ、スポッと石が水へ投げ込まれた。あひるはとんきょうな顔をして首を伸ばしたまま、鳴きながら、せわしく足を動かして上流のほうへ泳いで行った。自分はねずみの最期を見る気がしなかった。この小説は、死ぬかも知れなかった交通事故で受けたケガの後養生のためにやって来た直哉が、この地で目撃した蜂・ねずみ・いもりの三つの死を通して、人間の生と死についての深い思いをつづったものであった。直哉のいた同じ宿にいるとの思いがした。この宿の人の説明によると、実際は「但馬屋」さんであったとのこと。城崎温泉の名物は何と言っても鴻ノ湯・地藏湯・柳湯など七つの外湯巡りである。「鶴の屋」の

30m 先に二つの外湯があって、タオルやせっけんを入れた籐編みの小さなカゴを手を下げた湯客が、三三五五下の通りを行きかっている。自分は二つのはしご湯をして床に入ったが、カラン・カランという下駄のこきみよい音を聞きながらいつしかぬむりについてた。

翌朝は早く目が覚めた。フロントで天橋立までの道と途中の名所などの説明を受けて出発した。円山川に沿った道を20分程南下して走った所に、天然記念物に指定されている玄武洞があった。玄武洞とは白虎洞など四つの洞の総称であるが、地下でゆっくりと固まった玄武岩の結晶がみごとな自然の造形美を見せていた。R 3 1 2 を豊岡市まで行き、そこからR 4 2 6 に入って旧城下町の出石に立ち寄った。出石は沢庵和尚の出身地で有名であるが、また出石焼もよく知られている。観光の町らしく土産物店や出石焼を売っている店が多い。市街地を抜け出た所に新しいドライブインが建っていたが、一休みのつもりで入ってみた。甘党の私はぜんざいを注文した。口なおしに添えられていたのは、本場沢庵和尚の沢庵漬けであった。バリバリとした歯ざわりの味をかみしめながら売店で二本買ってみた。出石焼は純白の磁器がその特徴である。白磁の中でもアイボリー調の温かみのあるものがどちらかと言えば好きであるが、また純白の白磁には冷やかに感じられるものの清楚な気品が漂っている。ドライブイン隣りに出石焼の窯元の工房があって、ロクロ回し、釉がけ、窯詰めなど一連の制作工程を観光客に見せている。展示室と売店にはたくさんの作品が陳列されているが、食器類より白磁として特色がよく生かされた置物や飾り物用のものが多いようであった。工房の棚には、引き出物や祝いの贈り物として注文を受けたものだろうか、某家・某社の銘の書かれた本焼き前の作品が並べられていた。

出石を後にして天橋立へと急いだ。R 4 2 6 を但東町まで来た所で、近道であると宿で教えられた脇道に入ってしまったが、ここからは幾つもの山坂を越えてやっとの思いで県境の岩屋峠までたどりつくことができた。峠を越えると京都府である。国道に出た所の天橋立まで15kmの標示にほっとしながらも、あせる気持ちを抑えての安全運転で走らせ、文珠堂前の駐車場に車を置くことができた。昼の12時を過ぎていたので、駐車場でもらった割引券のきく土産店で昼食を済ませることにした。注文したあさり丼は大変美味しかったが、

宮津湾で採れたあさりであろうか。鹿児島錦江湾のキビナゴ、広島湾の小さいわしとその地方独特のいわしがあるが、宮津湾といえば金太郎いわしが有名である。店々では干し物にされたキンタルいわしを焼きながら売っているが、うまそうな匂いにつられ、試食の一尾を口にほおぼりながら家への土産に買った。見学コースの出発は何はさておき、「三人寄れば文珠の知恵」の発祥の地である文珠堂への参拝からである。頭をよくなること一つを祈願して、3.7km程の砂州を傘松公園まで歩くことにした。松並木の中をゆっくりとした足どりで右を見ては左に目をやりながら、海に映える白砂青松は見る位置によってそれぞれの趣があった。岩見重太郎仇討の場や与謝蕪村句碑を見て歩く中間点あたりに、「橋立の松の下なる磯清水都なりせば君も汲ままし」と詠んだ和泉式部の平安の昔から、今もかれることなく水の湧き出ている磯清水があったが、日本名水百選の一つに指定されているらしい。約1時間の徒歩で対岸の籠神社に着いた。ここからケーブルカーで傘松公園に登った。右を阿蘇海に、左を宮津湾の二つに分けて続く緑の帯となって見える。多くの観光客が、元祖股のぞき台と書かれた台の前で順番待ちをしている。私の番になり、大きく開いた股の間より顔を入れてのぞいてみた。「天橋立」の言葉通り、天とこの世を結ぶ通路のように空に続いていた。頼山陽によって言われた日本三景、その中の一景に入っているのも当然である。眺望を十分にたんのうし、下山にはリフトを利用した。目の前に橋立を見ながらだんだんと下がっていったが、錯覚であろうか、橋立を天に向かって上っているような気がした。念願を果たした満足感に浸りながら天橋立を後にしたのは5時を過ぎていた。薄暗くなりかけた頃、左手前方に大きくゆったりとした山が見えてきた。鬼退治の酒吞童子の伝説



天橋立

で有名な大江山であろうか。和泉式部が夫の任地の丹後にいた時、幼い頃よりすぐれた歌才で知られた娘の小式部内侍が、「母君が不在で心細いね。歌の相談に使いはやりましたか、使いは帰ってきましたか」とからかわれた際に「大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」と詠んだという百人一首の歌を頭に浮かべながら、中国自動車道を一路三次に向けて走らせていた。



郷土の歴史

呉についての史料紹介
 一般科目教官 宇根俊範



呉の地名の由来については諸説ある。低湿地を示す地形を「くれ」と呼んだことによるとか、灰ヶ峰等9つの嶺に囲まれているところから「九嶺（クレ）」になったとも、古代海外からの渡来人集団呉人（クレビト）にちなむものとも、昔灰ヶ峰から船舶の材料とし

ての樽（クレ）の木を多く産出したことによるともいわれている。

先日所被言上条々等、委令申上了
 （中略）
 一、安摩莊呉浦事
 召取国司序宣、成副序御下文、
 遣僧正御許了、自彼定被奉送
 歟
 （中略）
 以前条々、令旨如此、仍執達
 如件
 六月二十八日 散位資隆*

この呉の地名が歴史上はじめて見える史料が上に掲げた永暦元（1160）年のものと推定される高野山文書である。呉について記した歴史的史料がこのように12世紀半ば頃までないということは、とりもなおさずそれ以前の呉についての歴史を知ることが非常に困難にしているのであり、私達にとっても残念なことであるが、そのうえ、この時期、12世紀頃の呉についてふれた文献もきわめて少なく、古代・中世の呉の実像にせまることはむずかしいのである。

そこで、呉の初見史料といわれる先の史料から、どのようなことがわかるのか史料解説をしてみたい。漢文なので読みづらいし、またこの1通の文書からだけではなかなか意味のとれないところもあるであろう。まず、史料の呉に関する部分について読みくだしてみよう。

あまのしょうくれうら
安摩庄呉浦の事

国司^{めしと}宍宣（こくしちょうせん）を召取り、宍御下文（ちょうのおんくだしぶみ）を成し^な副^そえ、僧正^{そうじょうおん}の御^も許^{つかわ}に遣^{おわん}し了ぬ。彼より定めて送りたてまつらるか。

大体、以上のように読むが、この文書は文書の形式からいえば、美福門院（びふくもんいん）の令旨（りょうじ、皇太子・皇后たちの発給する文書を令旨とよぶ）とされるものであり、美福門院とは、鳥羽天皇の皇后藤原得子（1117～1160）なる人物で、近衛天皇の母で有名な保元の乱の原因をつくった人物でもあり、彼女はここに見える安摩庄〔衣田島（現江田島）、波多見島（現音戸町）、矢野浦（現安芸区矢野町）、呉浦（現呉市）など広島湾東部沿岸島嶼一帯を領域とする荘園〕という荘園の本家（寄進地系荘園の名義上の領主）である。

この安摩庄の年貢については、既に長承元（1132）年、鳥羽上皇によって高野山西塔仏聖人供料（高野山西塔の経営を維持していくための費用や人件費のようなものと思われる）として宛てられており、おそらくその年貢が高野山側に現地の複雑な状況がからんではられていない状況が生じたのであろう。

高野山金剛峯寺は美福門院の院司（院の役人）であった藤原資隆を通じて美福門院にこの状況を訴え、その申請についての美福門院の意向または処置を資隆がうけたまわって（史料中最後の「資隆[※]」とは、その意味である）、高野山側に伝えたものがこの文書である。

美福門院は、安摩庄呉浦の荘園たちに、本来払われるべき高野山西塔仏聖人供料の年貢を高野山側に納めるよう督促する国司宍宣（京にいた定芸守藤原隆行が安芸国の役所の官人たちにあてた文書）と院宍御下文（美福門院の院務処理機関＝院宍の発給した文書）を僧正（高野山の関係者、おそらく京都の東寺の長者寛遍なる人物であろう）のもとに送ったので、僧正から

高野山にそれが送られるだろうと知っているのである。

このように、この史料から呉について知り得ることは、はなはだ少ない。しかし、「呉」の地名の初見史料として、この史料は極めて貴重なものなのである。なお、ほぼ同時期に石清水八幡宮領の1つに「呉保」という地名が見えるが（石清水文書）、ここに見えた安摩庄呉浦との関係は不明である。

参考文献「角川日本地名大辞典」34広島県

- 「図書室では静粛に」
- 「読んだ本はもとの位置へ」
- 「帯出期間を守ろう」



- 「図書室での飲食はやめよう」

海外だより

冬のギリシア紀行
一般科目教官 岩根三邦

アテネの白いバラ 四角い黒縁眼鏡の女性ボーカリスト、ギリシアの首都アテーナイ（アテネ）生まれのナナ・ムスクーリは歌う。

有難う、あどけなく笑う子供
時々涙を流してくれる空
メルシー、心地よい夜風
一人の女性が歌う希望の歌
ハレ……ハレルヤ……

有難う、いつか会った友
私の心の中にまだ住んでいる
そしてこの何百万という恋
誰も物語を話さない恋にも、有難う
ハレ……ハレルヤ……（中略）

有難う、この宇宙
斜めに進むけれど、回っている
メルシー、この人生
最後まで回り路をする価値のある
ハレ……ハレルヤ……



照明に浮かぶパルテノン神殿の内部

レコード「愛のハレルヤ」の一節であるが（ハレルヤとはヘブライ語で「神を讃めたたえよ」の意で、喜びや感謝を表わす）、彼女の最初の大ヒットが、見出

しの「アテネの白いバラ」である。これは1959年、ドイツで120万枚というミリオンセラーを記録したという。また彼女は、1974年夏来日、NHKテレビ「ビッグ・ショー」に出演して、日本語で「赤とんぼ」を歌っている。

今昔の思いを込めて 今を溯ること2400年の昔、かのソクラテスがそこで生き、そのポリス（都市）の法によって死を宣告され静かに毒杯を仰いだ地、と同時に、50の齢を超えた今なお、清らかに澄んだ歌声で世界の人々を魅了し続けるナナ・ムスクーリ生誕の地—アテネ。この二人の男女に対する憧憬から、ギリシアの国・アテネの町を訪れるのが私の生涯の夢の一つであったが、昨年度西ドイツ留学からの帰途、それを実現する幸運に恵まれた。



「アテネ古代アゴラ(市場)跡」入場券

思えばちょうど1年前、この憧れの地アテネの土を、まぎれもなく私の足は踏んでいたのである。無量の感謝の念を胸に、見聞の一端を紹介する。

ギリシア人気質 12月11日予定通り、ギリシアの国営オリンピック航空機で、専用のアテネ西空港に到着する。すぐ空港バスに乗り換え、市の表玄関シタグマ（憲法）広場へ。ここまではまあ問題は無かったのであるが、さて迎いを見回してみると、乗客はそれぞれタクシー・市内バス・電車で散ってしまい、終点に佇んでいるのは、不安と緊張に頬を硬張らせ途方に暮れている私ただ一人。いつものことながら、ここアテネでも、知人はおろかホテルの予約すらも私には無かったのである。

ショルダーバッグを肩に、30数キロのトランクを引いて、通行人に教えてもらった近くの Tourist office のドア押す。中には二人の男がいたが、私の下手な英語に厭な顔ひとつせず詳しく聞いてくれ、すぐにいくつかのホテルに電話してくれた。そして、「お前の希望よりも安い料金で、お前の希望より1ランク上のを予約してやった」とウインク。私は半信半疑だったがその言葉に間違いは無かった。タクシーで着いたホテルの、案内された部屋の料金表には、その3倍に近い数字が明記してあったのである。どうも、冬のシーズンオフ・長期滞在というオフィスの人の交渉で、大幅に値引きしてくれたものらしい。1階にはスーベニアショップや貴金属店、屋上にはプールも完備の、私にはデラックスのランクに近い。しかも、バス・トイレ・バルコニー付きのツインルーム、更にそのバルコニーからは、アクロポリスとハルテノン神殿を眺み見ることができたのである。



モナスティラキ広場の露天市

ギリシア人と一口に言っても一様ではないが、私が2週間余りのアテネ滞在中に接した人々は、おおむねこのように、東洋からの異邦人を暖かく迎えてくれた。ギリシア神話の最高神「ゼウス」には「フィロクセニオス（客を歓待する、もてなしの厚い）」という詞が常套的に冠されるが、かつて「フィロソフィア（知恵を愛すること、つまり哲学）」を生んだ地の人々は、今もまた「フィロクセニオス（旅人を愛する人）」でもあったのである。

DATSUNの相乗りタクシー アテネでは（人口は現在250万を超えていると言われる）、日本の都市と違って、流しのタクシーがなかなかつかまえない。市内では一般に数が少ないようであるが、それだけが原因なのではない。何と、タクシー（の運転手）の方

が客を選ぶのだ！ 街で手を上げタクシーが近寄ってきても、乗せてもらえるとは限らない。運転手は、既に乗せている客の目的地と同一方向の客だけをひろって、平気で相乗りをさせるのである。しかも料金は、各自が目的地までの分を払うのだから、その分だけ水揚げが増すという仕掛け。私がシタグマ広場に到着直後、前述のホテルまで利用したタクシーの場合は、途中最も多い時には4人が相乗りだった。しかし、考えてみれば、乗客はそれぞれ必要な距離を乗って目的を果たしたのであり、料金も日本よりはるかに安いことから、損をしたと思わない方がよいのかもしれない。

車種は、古いニッサン・ブルーバードをよく見かけたが、車体の表示はNISSANではなくDATSUNとなっており、人々は「ダツツン」と発音していた。日本車の評判は上々で、カメラ等に続き、日本製の車が世界中の至る処で氾濫するということになるのも、そう遠くないのだろうか。

ブドウ酒色の海原、エーゲ海 アクロポリスの丘の上に聳え立つパルテノン神殿や、6体のコレー（乙女像）で知られるエレクトイオン神殿の回りには、何時も観光客が溢れ（日本からのツアーも多い）、ひとり静かに、この神殿の完成した紀元前5世紀の昔に思いを馳せ浸るのを容易ならしめず。



スーニオン岬のポセイドン神殿

そこで一日を、エーゲ海クルーズに参加する。こういう時は、大きなホテルに宿を取るのが便利で、フロントで予約すれば、観光旅行会社のバスが送迎してくれるのである。申し込んだのは、サローン湾に浮かぶエギナ・ボロス・イドラの3島を日帰りの船旅で楽しむインスタント・コースなのだが、その日は雨期の冬にしては珍らしく雲一つない晴天で、まさに「紺碧のエーゲ海」そのものであった。

古代ギリシアの詩人ホメロスは、「ぶどう酒色なせる海」と詠んだが、スーニオン岬（アテネから70キロ）から眺めた夕陽に染まるエーゲの海は、本当に飲み干してしまいたいほどの色で、ポセイドン神殿の列柱のシルエットと相俟って、今でも私の脳裡に焼き付いている。

ウゾーとなすのムサカ ぶどう酒の言葉が出たところで、ギリシアの酒について少しお話ししよう。

アクロポリスの麓の一面（北側）に、「アテネのモンマルトル」とも称される、プラーカという夜の観光地区がある。そのこのタベルナ（昔ながらの酒と料理を出す居酒屋風の食堂）で一夜、ブズキ（マンドリンを大きくしたような民族楽器）の演奏を聴きながら、ギリシアの地酒と料理を賞味した。まず普通に飲まれるのが、「レツィーナ」と呼ばれる松やに入りのぶどう酒。11%のアルコール度で、松やにの揮発性の香りがアクセントになっていかにも地酒らしい風味を醸し出しているが、慣れないと飲みにくい。もう一つが、見出しの「ウゾー」というギリシア独得の蒸溜酒。こちらの方はぶどうの皮と松やにで作られるらしいが、アルコール度はほぼ50%で、喉が焼ける。水で割ると、白く濁るのも面白い。

料理は「メリツァーネ・ムサカ（なすの、挽き肉のオープン焼き）」を注文したが、オリーブ油が強くあまり口に合わない。当地では、高級料理の部類に属すること。飲食の途中、500ドラクマ（1Drs≒1円）を奮発して、ナナ・ムスクーリの1曲をリクエストする。



プロクセーネの墓碑

ケラミコスの「母と子の墓碑」 シンタグマ広場からアテネの銀座通り、エルムー通りを西に20分も向か

うと、英語のCeramics（陶磁器）の語源となったケラミコスの遺跡に行き着く。古代ギリシアの墓地跡であるが、古来「陶工区」として秀れた陶器を産出したのである。現在も壮麗な墓碑浮彫が、私が訪れた時も、冬草の緑の中に、「つわものどもが夢の跡」として散在していた。めぼしいものは、ケラミコス博物館・国立考古学博物館に収蔵されているが、その一つ、写真の「プロクセーネの墓碑」を紹介しよう。（「国立考古学博物館」蔵、第18室）

椅子に腰を下ろしている女性は、髪の高い薄い衣を身にまとい、頭もヴェールで覆っている。膝元に寄りすがって見上げる少年の顔を、母親と思しきこの婦人は、悲嘆にくれた眼差しで力無く見つめている。この女性が、右腕の前の部分が失われている墓碑の主なのであろうか。彼女の背後には、娘がはげましの手を肩にあてているが、涙をこらえきれず指先でそっと拭っている。

全体の構図と一人一人の表情とが見事に調和し、感動的な情景を浮彫にしている。ケラミコス出土の、紀元前360年頃の作という。

汝自身を知れ 年の暮れの日、アテネからバスで4時間、ついに「大地のへそ」（古代ギリシア人は



聖地デルフォイのアポロン神殿

この地を世界の中心と考え聖域とした）、デルフォイ（デルツィ）に至る。神託で知られたアポロン神殿の跡には、ただ6本のドーリス式列柱が空しく立っているばかりで、「汝自身を知れ」という言葉が刻まれていたという壁は既に崩れ落ち、その痕跡すら無い。しばし佇み、かのソクラテスの「無知の知」に思いを致し、去り難し。

情報処理関係図書の受け入れについて

この度、図書委員会にて協議した結果、情報処理及び電算関係図書の充実を図るため、下記の図書を発注しました。閲覧室に配架されるのは、2月下旬になる予定です。授業の関連で読むもよし、一人で学ぶのもよし精一杯ご利用下さい。(順不同)

記

演習COBOL (加藤 昭) オーム社
 明解COBOL (今城 哲二) サイエンス社
 入門COBOL (西村 恕彦等) オーム社
 パソコンOS戦争 (山田 哲也) 日刊工業新聞社
 パソコンファイルの作り方 (神納 一郎) オーム社
 パソコンによる機器分析演習 (吉村忠与志) 共立出版
 パソコンによるデータ解析 (赤池 弘次) 朝倉書店
 パソコンで見る関数グラフィクス (糸岐 宜昭) 森北出版
 パソコン画像処理 (花木真一等) 昭晃堂
 デジタル画像処理入門 (パークシズ) 啓学出版
 工学用画像処理 (江尻 正員) 昭晃堂
 C言語のデバック手法 (R・ウォード) 啓学出版
 入門TURBO C (荒 実) 〃
 Cによる有限要素法のプログラミング (黒木 健実) 森北出版
 C言語実用数値処理プログラム集 (古川 敏則) 近代科学社
 効果的プログラム開発技法 第3版 (国友 義久) 〃
 高校生のためのBASICプログラミング (竹内 和夫) 啓学出版
 ワープロ使いこなし技術 (谷岡 康則) 日本実業出版社
 一太郎パワーアップツール (宇田川一彦) 学習研究社
 FORTRANによる数値計算 (ピアソン) 朝倉書店
 FORTRAN-77 科学技術計算サブライブラリ (黒瀬 能事) 啓学出版
 MS-C実践グラフィクス (大関 浩一) 山海堂
 基礎MS-DOS & BASIC (黒田 康太) 東京電機大出版局
 グラフィクス サブルーチン MS/PC-FORTRAN版 (伊藤義人等) 日刊工業新聞社
 コンピュータの論理構成とアーキテクチャ (楠 菊信等) コロナ社

ハードウェア工学概論 (高橋 茂) 共立出版
 電子計算機概論 (石川甲子男等) 培風館
 d BASE III PLUS リファレンスブック (西尾 忠彦) 日刊工業新聞社
 知識情報処理ハンドブック (福村晃男編) オーム社
 ソフトウェア工学ハンドブック (ゼネラル・エレクトロニック社編) マグロウヒルブック
 要点と演習 1種 ソフトウェア (オーム社編) オーム社
 〃 1種 ハードウェア (〃) 〃
 〃 1種 プログラムの設計と作成 (〃) 〃
 〃 1種 関連知識 (〃) 〃
 情報科学 (相原 恒博) 共立出版
 情報の基礎数学 (高松吉郎等) 培風館
 PASCAL入門 (永野 三郎) 東大出版会
 PASCALによる基本アルゴリズム (P・V・モファット) 啓学出版
 TURBO PASCALで学ぶエキスパートシステム (B・ソーヤー等) 〃
 現代オペレーティングシステムの基礎 (萩原 宏) オーム社
 3次元シュミレーション技術 (川辺 真嗣) 工業調査会



新着図書案内

(昭和63年9月～12月受け入れ図書室備付分)

> O 総 記 <

- 人工知能 (豊田 順一) 昭 晃 堂
 情報が走る 世界が変わる (NHK取材班) 福 村 出 版
 TRONからの発想 (坂村 健) 岩 波 書 店
 情報処理と電子計算機 (有澤 誠) コ ロ ナ 社
 情報処理英語 (浅川 修等) 実 教 出 版
 データベース入門 改訂2版 (穂鷹 良介) オ ー ム 社
 ワークステーションがわかる本 (工藤安信編) 工 業 調 査 会
 MS-DOS (瀬藤一起等) 共 立 出 版
 ニューロコンピュータ (甘利俊一編) コ ロ ナ 社
 Macintosh 増補版 (西林 瑞夫) 共 立 出 版
 岩波講座 ソフトウェア科学 岩 波 書 店
 1: 計算システム入門 (所 真理雄)
 2: プログラミングの方法 (川合 慧)
 6: オペレーティングシステム (前川 守)
 OS概論 (久保 秀士) 共 立 出 版
 PC 9801 機械翻訳プログラミング入門 (CSK総合研究所編) 日刊工業新聞社
 パソコン画像処理 (花木真一等) 昭 晃 堂
 Cプログラミング入門 (石田 晴久) 共 立 出 版
 はじめてのプログラミング (A・ケラー) マグロウヒルブック
 MS-DOS特選ユーティリティ集 1 (藤本文彦編) 技 術 評 論 社
 ALA図書館情報学辞典 (Heartsill Young編) 丸 善
 アメリカ合衆国における図書館自動化システム (池田 秀人) 紀伊国屋書店
 学術情報システムと大学図書館 (猪瀬博等編) 紀伊国屋書店
 もっと本を読もう (増田 信一) リブリオ出版
 現代用語の基礎知識 1989年版 自由国民社
 日本大百科全書 小 学 館
 24: リコーン
 朝日選書 朝 日 新 聞 社
 349: 兵士たちの日露戦争 (大江志乃夫)
 359: マラソンランナー (宇佐美彰朗)
 360: 日本語開化物語 (惣郷 正明)
 361: テレビの社会史 (岡村 黎明)

- 362: 羊と樅の木の歌 (みやこうせい)
 363: 江戸期のナチュラルリスト (木村陽二郎)
 364: マフィア (竹山 博英)
 365: 情報の文化史 (樺山 紘一)
 366: 植物学のおもしろさ (本田 正次)
 岩波セミナーブックス
 27: 新約聖書の女性観 (荒井 献) 岩 波 書 店
 新釈漢文大系 明 治 書 院
 49: 戦国策 下 (福田襄之介等)
 99: 白氏文集 3 (岡村 繁)

> 1 哲 学 <

- ハイデッカー選集 理 想 社
 33: ロゴス・モイラ・アレーティア (ハイデッカー)
 魅力を身につけるには (R・W・ワイルド) 中 央 出 版 社
 記憶力を強めるには (ジャクリーン・ディニーン) ♪
 想像力を活用しよう (レスリー・コース) ♪
 内気をなおすには (C・H・テイヤー) ♪
 自己暗示しよう (ヒーター・フレチャー) ♪
 意志を強くするには (J・ケネディ) ♪
 一歩先を読む生きかた (堺屋太一等) 三 笠 書 房
 友だちをつくるには (C・H・テイヤー) 中 央 出 版 社

> 2 歴 史 <

- 世界現代史 山 川 出 版 社
 27: ポーランド現代史 (伊東 孝之)
 国史大辞典 (国史大辞典編集委員会編) 吉 川 弘 文 館
 9: たかて
 年表日本歴史 (村井益男等編) 筑 摩 書 房
 5: 江戸後期 (1716-1867)
 河原にできた中世の町 (網野善彦等) 岩 波 書 店
 戦国時代の村の生活 (勝俣鎮夫等) ♪
 戦乱の日本史 [合戦と人物] 第1巻-第12巻 第 一 法 規 出 版
 岩波ブックレット シリーズ昭和史 岩 波 書 店
 4: 日独伊三国同盟と第二次大戦 (木畑 洋一)
 5: 新版 南京大虐殺 (藤原 彰)
 9: 占領と戦後改革 (竹前 栄治)
 11: サンフランシスコ講和 (佐々木隆爾)
 動く年表 自 由 国 民 社
 呉市史 第6巻 (呉市史編纂委員会編) 呉 市 役 所
 敦煌 (長澤 和俊) 徳 間 書 店

ローマ帝国衰亡史 第6卷 (E・ギボン) 筑摩書房
 坂本龍馬事典 (小西四郎等編) 新人物往來社
 「困ります、ファインマンさん」
 (R・P・ファインマン) 岩波書店
 古代のエジプト (ジョン・ベインズ等) 朝倉書店
 古代のギリシア (ビーター・レーヴィ) ♪
 古代のローマ (ティム・コーネル等) ♪
 アフリカ (ジョリスン・マーレイ) ♪
 NHK地球大紀行 1-6 (NHK取材班) 日本放送出版協会
 角川日本地名大辞典
 (「角川日本地名大辞典」編集委員会編) 角川書店
 28: 兵庫県
 日本歴史地名大系 平凡社
 9: 栃木県の地名

> 3 社会科学 <

岩波ブックレット
 121: 日本人と牛肉 (荏開津典生) 岩波書店
 122: “子連れ出勤”を考える (アグネス・チャン等)
 123: 住宅憲章 (日本住宅会議)
 124: 自由人権とナショナリズム (久野 収)
 アジア・その成長と苦悩 (渡辺 利夫) 日本放送出版協会
 中国の選択 (那須 賢一) 大月書店
 語りつぐべきこと (澤地 久枝) 岩波書店
 天声人語 自然編 (辰濃 和男) 朝日新聞社
 指導者とは (リチャード・ニクソン) 文藝春秋
 プライバシーが筒抜け (馬場 恭子) ♪
 現代日本外交史 国際資料協会
 やさしい民法 高橋書店
 やさしい刑法 ♪
 ワープロ用語図説事典 (泉 均) 山海堂
 日本統計年鑑 第38回 昭和63年
 (総務庁統計局編) 日本統計協会
 ヒトの開国かヒトの鎖国か (石川 好) ハンリサーチ出版局
 国際感覚をみがく本 (寺谷 弘王) 三笠書房
 アンケート調査の方法 (辻 新六等) 朝倉書店
 勉強の能率をあげるには
 (マーティン・ロウス) 中央出版社
 日本の高校 (トーマス・ローレン) サイマル出版会
 日本で学ぶ留学生 (岩田寿美子等) 勤草書房
 キャンパス・トピックス (神保信一編) 誠信書房
 ドレスアップ・ドレスダウン
 (バル・バインダー) 岩波書店
 服装の歴史 1-5 (村上 信彦) 理論社
 たばこを考える 2
 (たばこ総合研究センター編) 平凡社
 バンの歴史 (ウィルヘルム・ツイアー) 同朋舎出版

> 4 自然科学 <

自然科学概論 (小野 周) 朝倉書店
 理科年表 第62冊 昭和64年
 (国立天文台編) 丸 善
 算数をパズルふうにな (古屋 茂) 岩波書店
 数学トレーニング 新装版 (小林 弘) 東京図書
 応用代数 (伊理正夫等) コロナ社
 フラクタル科学 (高安秀樹編著) 朝倉書店
 確率論の基礎概念 第2版
 (A・N・コロモゴロフ) 東京図書
 FORTRAN実用数値処理プログラム集
 (吉川 敏則) 近代科学社
 物理学の最先端常識 1-2
 (後藤憲一等編) 共立出版
 身近な教養物理 (小暮 陽三) 森北出版
 物理学的世界像の発展 (田中 正) 岩波書店
 アモルファスな話 (米沢富美子) ♪
 基礎物理 (大槻 義彦) 共立出版
 理工科系わかりやすい物理学1
 (渡辺 昌昭) ♪
 物理実験入門 (小田幸康等) 裳華房
 物理学 One Point
 28: 時間の物理 (大槻 義彦) 共立出版
 理・工基礎 量子力学 (瓜生 典清) 裳華房
 現代力学 (武田 暁) ♪
 力学はいかにして創られたか
 (吉仲 正和) 玉川大学出版部
 エントロピーのすべて (小野 周) 丸 善
 高温超伝導 (ハリティ編集委員会編) ♪
 超伝導の謎 (菅原 昌敬) 森北出版
 いい伝えと化学 (古橋 昭子) 裳華房
 失敗は成功のもと (宮田 光男) ♪
 フッ素の化学 (國分 信英) ♪
 宇宙の旅200億年 (森本 雅樹) 岩波書店
 ドキュメント超新星爆発 (野本 陽代) ♪
 日本の暦 (渡邊 敏夫) 雄山閣
 大学教養 生物学 2訂版 (入来重盛編) 森北出版
 バイオセンシング (軽部征夫編) 啓学出版
 磁気と生物 改訂第2版 (高橋不二雄) 学会出版センター
 糖質 (浅岡 久俊) 丸 善
 バイオサイエンスへの招待 (石川 統) 岩波書店
 川と湖の生態 (小泉 清明) 共立出版
 生態学総論 (門司 正三) ♪
 植物の生産過程 (木村 允等) ♪
 植物の相互作用 (穂積 和夫) ♪
 動物・植物および微生物の相互関係研究法
 (飯泉 茂等) ♪

植物文化史 (臼井 英治) 裳 華 房
 植物解剖図説 (植田利喜造編著) 森 北 出 版
 新日本動物圖鑑 上・中・下 (岡田 要等) 北 隆 館
 日本動物解剖図説 (広島大学生物学会編) 森 北 出 版
 日本にきた虫・くる虫 (大竹 昭郎) 裳 華 房
 アリからのメッセージ (今井 弘民) ♪
 四季の野鳥 (唐沢孝一等) ♪
 いのちの尊厳 (日野原重明等) 同 朋 舎 出 版
 いのちの終末をどう生きるか (日野原重明) 春 秋 社
 からだの見方 (養老 孟司) 筑 摩 書 房
 老化の原点をさぐる (鈴木 曄之) 裳 華 房
 脳 (久保田競編) 朝 倉 書 店
 恐怖心をなくすには (W・J・マクブライド) 中 央 出 版 社
 臓器移植48時間 (雨宮 浩) 岩 波 書 店
 ストレスを解消するには (W・ノースフィールド) 中 央 出 版 社
 神経過敏をなおすには () ♪
 健康・体力づくりの栄養学 (大磯敏雄等編著) 大 修 館 書 店

> 5 工 学 <

サンサ工学入門 (清野次郎等編著) 森 北 出 版
 光センサとその使い方 (谷腰 欣司) 日 刊 工 業 新 聞 社
 先端材料ハンドブック (鈴木敏正等編) 朝 倉 書 店
 材料利用ハンドブック (中小企業事業団中小企業研究所編) 日 刊 工 業 新 聞 社
 技術史を拓いた人々 3 ♪
 発明家のための磁石の使い方 (石井 重三) ♪
 しびるえんじにありんぐえっせい (小泉 純一) 山 海 堂
 新体系土木工学 技 報 堂 出 版
 13: 土木計測 (岡村甫編著)
 73: 河川の計画と調査 (西原巧編著)
 わかり易い土木講座 彰 国 社
 10: コンクリート工学(I)施工 新訂版 (樋口芳朗等)
 11: コンクリート工学(II)設計 新訂第2版 (後藤幸正等)
 14: 施工 新訂版 (白石俊多等)
 建設2001年物語 (グループ建設21) 都 市 文 化 社
 最新コンクリート工学 (岡田 清編) 国 民 科 学 社
 擁壁及びガバルートの設計と考え方 改訂版 (岩松幸雄等) 鹿 島 出 版 会
 橋 1986—1987 土 木 学 会

鋼橋の維持管理のための設備 (鋼構造進歩調査小委員会編) 土 木 学 会
 日本の環境政策 (宮本 憲一) 大 月 書 店
 ドキュメント 日本の公害 緑 風 出 版
 2: 環境庁 (川石 英之)
 快適環境と騒音防止設計 (福原博篤等) 彰 国 社
 公害食品 (堀口 博) 三 共 出 版
 食生活の安全 (吉田 勉) ♪
 工匠たちの知恵と工夫 (西 和夫) 彰 国 社
 建築技術史の謎を解く () ♪
 私の建築辞書 (石井 和紘) 鹿 島 出 版 会
 建築 1—2 彰 国 社
 建築を侮蔑せよ、さらば滅びん (渡辺 豊和) ♪
 西澤文隆の仕事 1—3 (西澤 文隆) 鹿 島 出 版 会
 世界平和記念聖堂 (石丸 紀興) 相 模 書 房
 白川村の合掌造集落 白川村教育委員会
 看板建築 (藤森照信等) 三 省 堂
 建築と新素材 (檉野 紀元) 鹿 島 出 版 会
 鉄筋コンクリート工学 (岡田 清等) ♪
 パースの描きかた (西日本工高建築連盟編) 彰 国 社
 建築プレゼンテーション・マニュアル 1—4 (T・ポーター等) 集 文 社
 建築外部空間 (志水英樹等) 市 ヶ 谷 出 版 社
 設計基礎 (計画・製図・単位空間) (高木幹朗等) ♪
 設計基礎 (構造・環境設備・法規) (荻野 郁太郎等) ♪
 事務所ビル (藤江澄夫等) ♪
 超高層事務所ビル (渋谷英衛等) ♪
 GA Houses 世界の住宅 23—24 (ウエイン・藤井編) A. D. A. Edta Tokyo
 新感覚の二世帯住宅 講 談 社
 住宅 1 (富井正憲等) 市 ヶ 谷 出 版 社
 床の間のはなし (前 久夫) 鹿 島 出 版 会
 スイッチング回路理論演習 (当麻喜弘等) コ ロ ナ 社
 超電導 (猪口 修道) 日 刊 工 業 新 聞 社
 結局、超電導で世の中はどうか (増田 正美) ネ ス コ
 絵とき第二種電気工事 1 (五十嵐孝仁等) オ ー ム 社
 電力200V時代 通 産 資 料 調 査 会
 ノイズ入門 (F・R・コナー) 森 北 出 版
 変調入門 () ♪
 光ディスク技術ハンドブック 日 経 マ グ ロ ウ ヒ ル 社
 図解 D A T 読本 (中島平太郎等) オ ー ム 社
 ニューメディア時代の電波応用技術 (西村 秀二) 日 刊 工 業 新 聞 社
 光通信理論 (広田 修) 森 北 出 版

やさしい超音波工学 (川端 昭) 工業調査会
 ITRON入門 (坂村 健) 岩波書店
 ロボット制御基礎論 (吉川 恒夫) コロナ社
 岩波講座マイクロエレクトロニクス 岩波書店
 5: マイクロコンピュータのハードウェア(森下 巖)

6: マイクロコンピュータのプログラミング
 (石田 晴久)
 7: プログラミング言語とVLSI (淵一 博等)

実用基礎電子回路 (大橋伸一等) コロナ社
 VLSIコンピュータ・アーキテクチャ
 (村岡 洋一) 近代科学社
 VLSI工学概説 (渡辺 誠) 昭晃堂
 パワーエレクトロニクス
 (ライネル・イェーガー) 森北出版
 光電子工学の基礎 (高橋晴雄等) コロナ社
 知られざる Ocean Life (種村 真吉) 成山堂書店
 鉄の歴史と化学 (田口 勇) 裳華房
 バイオの世界
 (日刊工業新聞バイオ特別取材班) 日刊工業新聞社
 においの化学 (長谷川香料編) 裳華房
 ニュー繊維の世界 (本宮 達也) 日刊工業新聞社

> 6 産 業 <

塗りかわる交通地図 読売新聞社会部
 マリーナの計画 (染谷昭夫等) 鹿島出版会

> 7 芸 術 <

芸術原論 (赤瀬川原平) 岩波書店
 夢二美術館 1-5 学習研究社
 流々遍歴 (丸木 位里) 岩波書店
 近代漫画 1-6 (前田愛等編) 筑摩書房
 色彩自由自在 (末永 蒼生) 晶文社
 旅廻り宇野重吉一座 (麥 秋 社) 岩波書店
 大学生の体力テストハンドブック
 (全国大学体育連合体力テスト委員会編) 道 和 書 院
 痛みからみるスポーツ傷害と診療のポイント 下肢編
 文 光 堂
 症例によるスポーツ外傷・障害の実際
 E・ザトベックの実像
 (デズニェク・トーマ) ベースボール・マガジン社
 遠い青春の快走 (田中館哲彦) 〃
 図解バスケットボール・ドリル
 (嶋田 出雲) 大修館書店
 バレーボールマインド (吉田 敏明) 道 和 書 院
 アーチェリー教本 (全日本アーチェリー連盟編) 講 談 社

> 8 語 学 <

話し上手になるには
 (マーガレット・パーキンス) 中央出版社
 手紙・はがきの書き方辞典 旺文社

> 9 文 学 <

ちくま文学の森 (安野光雅等編) 筑摩書房
 3: 幼かりし日々
 8: 悪いやつ物語
 11: 賭けと人生
 11: 機械のある世界
 15: とっておきの話
 M/Tと森のフシギの物語 (大江健三郎) 岩波書店
 菜の花郵便局 (つかこうへい) 〃
 ぼちぼち草子 (田辺 聖子) 〃
 詩と永遠 (辻 邦生) 〃
 疎開記 (坂井 真弥) 晶文社
 完訳 日本の古典 小 学 館
 23: 源氏物語10 (阿部秋生等校注)
 別2: 古典詞華集 2 (山本 健吉)
 昭和文学全集 小 学 館
 3: 志賀直哉、武者小路実篤等
 8: 野上彌生子、宮本百合子等
 14: 上林暁、和田芳恵等
 26: 吉村昭、立原正秋等
 31: 澁澤龍彦、中井英夫等

岩波新書新赤版

37: ドルと円 (宮崎 義一) 岩波書店
 38: 大恐慌のアメリカ (林 敏彦)
 39: パソコン入門 (石田 晴久)
 40: 中国改革最前線 (天児 慧)
 41: 台湾 (戴 國輝)
 40: 正倉院 (東野 治之)
 43: 農の情景 (杉浦 明平)
 44: 色彩の科学 (金子 隆芳)
 45: 問題群 (中村雄二郎)
 46: スイスを愛した人びと
 (笹本 駿二)
 47: 軍縮の政治学 新版 (坂本 義和)
 48: ラグビー 荒ぶる魂 (大西鉄之祐)
 別冊2: 私の昭和史 (加藤周一編)
 別冊3: 私の知的生産の技術 (梅棹忠夫編)

岩波ジュニア新書 岩波書店

- 147: 漢文の読みかた (奥平 卓)
- 148: 宇宙のかたちをさぐる (池内 了)
- 149: 高齢化社会ときみたち (三浦 文夫)

カラーブックス 保育社

- 755: 東京 緑 散策 (森ミドリ等)
- 759: 名古屋の電車 (白井 良和)
- 760: 薬膳入門 (難波恒雄等)
- 761: ベルシャ陶器 (加藤 卓男)
- 762: ローレル賞の車両 '88
(鉄道友の会編)
- 763: 正倉院の宝物 (関根 眞隆)
- 765: 秋・冬の花 100種 (大島 明義)
- 766: 健康美の温泉 (松井奈美子等)

寄贈図書

書名	寄贈者
25年史	山陽コカ・コーラボトリング(株)
NHK広島放送局60年史	日本放送協会広島放送局
AV CREATOR PIONEER	ハイオニア(株)
牛田山の自然	広島女学院
新体系土木工学 別巻	技報堂出版
広島国道のあゆみ	広島国道工事事務所
木曾三川~その流域と河川技術	建設省中部地方建設局
原発と人間	省エネルギーセンター



編集後記

本号(第20号)にて初めて英文が掲載されたのではないかと思います。フィリピンから本校へ研修生として来られたフラドー氏に、日本での思い出を英文で書いて頂いたものです。非常に平易に書いて頂いたため、学生諸君は容易に読めるのではないかと思います。このため、敢えて日本語に翻訳していませんし、また単語の注釈もしませんでした。

フラドー氏が日本に来られた時には、“どうもありがとう”、“おはようございます”、“こんにちは”、“こんばんは”の4つの言葉しか知らなかったようです。東京の日本語学校で2ヶ月間学ばれた後、本校へ来られましたが、その時でもまだ少しの単語しか知らなく、また方言や私たち

の会話が早く感じられたようで、慣れるのに2ヶ月間かかったようです。しかし、たった約1年の滞在期間中にもかかわらず、かなり上達されたようです。

工学を学ばれたことは勿論ですが、日本文化や日本人の多くの長を学ばれたことは、帰国後も日本での体験が大いに生かされるのではないかと思います。それと同時に、フラドー氏と接する機会の多かった特に機械工学科の学生諸君は、逆に彼から得ることも多々あったのではないかと推察されます。

来年度には、本校へ留学生が来る予定ですが、図書に関する外国人からの目を図書だよりで紹介できる機会があればよいと思う次第です。(大橋記)